

新渡戸稲造のアメリカ観

——心理的葛藤とその克服の試み——

澤田次郎

要旨

本稿は青年期から六十代にいたる新渡戸稲造のアメリカ観をトータルに検証し、彼がアメリカに対していかなる心理的葛藤を抱き、それをどのように克服しようと試みたかという点を考察するものである。そこで明らかにしたことは以下の三点である。

第一に新渡戸は、早くから学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国アメリカのイメージを深め、アメリカ留学時は政治経済学や歴史学、クエーカー教義を受容するだけでなく、周囲のアメリカ人の善意を体験した。留学を終えた後は円満で常識的なアメリカ人と接し、アメリカ社会の自由と民主主義に対する理解を広げつつ、かねてから抱くエイブラハム・リンカンへの敬愛を持続した。第二に新渡戸は、日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な排日論の挑戦を受ける形となり、日米両国民に対して融和と相互理解を訴えた。ただしアメリカの反日論者の主張に対しては強い怒りを感じており、その心はアメリカへの好意と怒りの相反する心情の間を揺れ動いていた。第三に新渡戸は、アメリカで一九二四年移民法（いわゆる排日移民法）が成立したことに衝撃を受けたが、アメリカ人の回復力を信じ、将来アメリカ人自身の手で同法の改正がなされることを期待する

ことによって、アメリカへの怒りを抑え、心理的葛藤を克服しようと試みた。

キーワード…新渡戸稲造、アメリカ、対米態度、対外認識、黄禍論、一九

二四年移民法、排日移民法

目次

はじめに

- 一 ポジティブなアメリカ像の形成
 - 二 ネガティブなアメリカ像の挑戦
 - 三 アンビバレンスの克服への試み
- おわりに

はじめに

新渡戸稲造（一八六二―一九三三年）は教育者、農業経済学者である

だけでなく、国際連盟の事務次長をつとめ、「太平洋の橋」の言葉に象徴されるように日米両国の相互理解のために尽力したことで知られている。

新渡戸はアメリカの大学院で教育を受け、同国出身の女性と結婚し、二度にわたってアメリカで講演活動を行うなど終生アメリカとの縁が深かったため、彼を通じて近代の日米関係史、とくにその精神史の一端に触れることができる。しかしながら新渡戸の言動がさまざまな領域に及び、多彩であったためあって、彼とアメリカの関係に焦点を絞った考察は必ずしも多いとはいえない状況にある。

これまでそうした研究として、①新渡戸のアメリカ留学時代、②アメリカで吸収したクエーカーの影響、③アメリカン・デモクラシーの摂取、④ウッドロー・ウィルソン (Thomas Woodrow Wilson) の行動・思想との比較などを対象としたものがある^①。さらに本稿とテーマの重なるものとして、⑤新渡戸のアメリカ観を扱った論稿がある^②。本稿はこのうち⑤のジャンルに含まれるものであるが、以下の点で先行論考の多くと異なる。第一に、新渡戸のアメリカ像を考察対象の正面に据え、青年期から晩年までトータルに把握することをねらいとする点である。従来の研究では、新渡戸の生涯のある一時期を限定的に眺めるものが多く、そのアメリカ観を大局的につかもうとするアカデミックな研究は、管見の及ぶ限りではまだ十分に行われていない。拙稿ではこうした従来の不足点を補い、長いスパンの中で新渡戸のアメリカ認識の展開を大きく概観するよう努めてみたい。

第二に、新渡戸がアメリカとどのようなように心理的に格闘したかという点を考察の主眼に置く点である。新渡戸は青少年期からアメリカに好意的なイメージを抱いていたが、やや遅れてアメリカにおける人種偏見というマイナス面に悩まされるようになり、同国のプラス・イメージとマイナス・イメージの間を葛藤しながら一九二四(大正十三)年成立の一九二四年移民法(以下、学術書でも用いられている通称の「排日移民法」の語を用いる)の衝撃を受けることになる。そうした心理的相克の中で彼はどのように頭の整理をつけようとしたのか、いかにアメリカの矛盾に対処しようとしたのかという点を追跡してみたい。従来新渡戸についてこのような問題意識にもとづいた研究は、管見の及ぶ限りでは、ほとんど行われていないが、アメリカの「良き面」と「悪しき面」に悩まされて混乱するというのは、現在の日本人(あるいはその他各国の人々)の間でもよく見受けられることである。新渡戸の精神的足跡をたずねることによって、日本人にとってアメリカとはどういう存在なのか、アメリカにはどのように対応したらよいのかという問題を考えてみたい。

第三に、研究方法として新渡戸の旧蔵書(アメリカ、イギリスで発行された洋書)の書き込みを利用する点である。新渡戸研究者が用いる基本文献は『新渡戸稲造全集』全二十三巻、別巻二冊であり、この全集はよく編集された充実した内容であって、それだけにここに収められていない新渡戸の文章を探することは難しい状況にある^③。そのため本稿では全集を中心に考察を進めつつ、それ以外に東京女子大学図書館新渡戸稲造記念文庫、北海道大学附属図書館新渡戸稲造文庫に保管されている新渡

戸の旧蔵書も活用し、そこに見られる書き入れも考察対象とする^④。全集に掲載された新渡戸の文章には公に向けて発信された評論が多いだけにどうしても余所行きの面があるとともに、読者への啓蒙をねらって意図的に書かれた部分が少なくない。しかしながら書物に記された書き込みには他人の目を意識しない本音が記されており、新渡戸の考え方を探究する補助線として活用できると考える。

その際、新渡戸が熱心に読んだ、すなわちインパクトを受けた形跡が明らかかな書物だけを選んだことはいうまでもない。彼の蔵書の中にはほとんど線が引かれていないものも少なくないため、そうしたものは対象から外している。また調査にあたって注意したのは、新渡戸以外の人物の文字が書かれている場合があることである。古書として入手されたものの場合は元の持ち主の書入れがあることもあり得ようし、東京女子大図書館では過去に学生に貸し出しを行っていた時期があるというため、そうした人々が記したと考えられる基本的な単語の意味や日本語訳などの文字が入っていることがある。しかし新渡戸自身の筆跡やライン、印のつけ方には特有の癖があるので、ここでは彼が記したことがわかるものを選定して組上に載せている。

なお本稿は、新渡戸の最晩年でありその人生のクライマックスに相当する満洲事変から、第一次上海事変勃発後までの時期（一九三一—三三年）の言動を説明するための前提作業となる。そのためこの時期のアメリカ像についての言及はできるだけ避けておくこととしたい。

一 ポジティブなアメリカ像の形成

本章では新渡戸がアメリカにどのような好意的イメージを形成したかを見ておきたい。そこでまずいえることは、少年期の新渡戸のアメリカ観がとくにユニークなものではなく、同時代の知識人と共通するものであったということである。

新渡戸は一八六二（文久二）年、盛岡藩士の三男として生まれた。明治初年、東京から遠く離れた盛岡にあっても、幼い新渡戸の周辺には西洋化の波が伝わっていた。それに敏感に反応した彼は次兄・道郎とともに叔父の太田時敏を頼って上京し、一八七一（明治四）年、九歳で築地外人英学校に入学した。さらに七三年、官立の東京外国語学校、七五年に同校の英語科が分離した東京英語学校（のち東京大学予備門に改称）に入学して英語の素養を身につける。福沢諭吉の『学問のすゝめ』を読んだのは、この東京外国語学校ないし東京英語学校時代（十二、三歳）であり、同書の冒頭「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」を読んだときの印象は忘れ難く、感動してこの文章をくり返し読んだという^⑤。このように新渡戸は同時代の向学心のある青年たちと同様に、福沢を媒介としてアメリカ独立宣言の前文に記された「すべての人間は平等に造られている」と共通の精神を受容したわけである。このころが彼とアメリカの精神的な出会いの最初期であったといっていよう。

一八七七（明治十）年、東京大学予備門を退校した新渡戸は札幌農学

校に入学し、八一年に卒業するまで、十五歳から十九歳の多感な日々を同校で過ごした。札幌農学校はアメリカ人教師を中心に英語で授業が行われ、いわばアメリカンスクールに近い環境にあり、そうした中で翌七八年、十五歳の新渡戸が内村鑑三や宮部金吾らとともにメソジスト監督教会のアメリカ人宣教師メリマン・C・ハリス (Merriman Colbert Harris) から洗礼を受け、同教会に入会したことはよく知られているとおりである。札幌時代の彼はアメリカ人宣教師から「欧米ではいかにも宗教が盛んで、その影響は社会の各方面に行き届いており、国民はあげて善男善女で、キリスト教国は楽園」といったことを聞かされたという⁽⁶⁾。

当時の日本知識人がアメリカを「キリスト教の聖地」ととらえがちであったことは先行研究が指摘しているが、新渡戸もまさにその一人であった⁽⁷⁾。

右のように若き新渡戸にとって、アメリカは学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国であった。札幌農学校を卒業後、開拓使御用掛、農商務省御用掛の勤務をへて、東京大学に入学した新渡戸は、同大学の授業にあきたらずに退学し、一八八四(明治十七)年、二十二歳で渡米してペンシルベニア州のアレゲネー大学、ついでメリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に大学院生として入学する。サンフランシスコに入港した際は夜間であったため、上陸は翌日となったが、「一刻も早くこの新大陸を見たい」と待ちきれない思いで甲板に上がり、ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe) の『ヴァルヘルム・マイスターの遍歴時代』の一節「ここぞアメリカなる、ここより外にアメリカはなし」(英語の場合、Here or nowhere is America.) をくり返し口

ずきみながら板上を歩き回ったという⁽⁸⁾。アメリカはまさしく憧れの地であった。

渡米後の新渡戸にとってアメリカは依然として学ぶべき教師の国であり、その点では他の日本人と変わらないといつてよいが、もし彼の独自性をあげるとすれば、アメリカの欠点ではなく良い面を見ようとする態度を意識的にとっていたことであろう。サンフランシスコ到着の前日、船内で親しくなっていたスコットランド人の老人が新渡戸に次のようなアドバイスを述べた。「いよいよ明日はアメリカの大陸に着く。君はこれから豪い所を見るんだ。西洋の習慣にも悪いことが沢山あって、君の国に劣ることも多い。しかし君は悪いことを研究するため万里の波濤を超えるのではない。御国のためになるようなことにのみ着眼して善きことばかり学んで来なさい」。親が息子に意見するようなこの老人の教えは「深く身に染み込ませ」と新渡戸は回想している⁽⁹⁾。もともとアメリカの良いところを学びたいという気持が新渡戸の心の素地にあり、それが老人の言葉に共鳴することによって一層深まったということであろう。上陸後、「彼が長を採ってわが短を補うの材料にしたい」というのが新渡戸の基本姿勢となる⁽¹⁰⁾。

この「アメリカの良い面を見ようとする」姿勢は新渡戸の生涯を通じて一貫する特徴になるので記憶にとどめておきたい。たとえば後年(一九二〇年)、新渡戸は「米國研究の急務」と題する文章を執筆しているが、その中で他国(アメリカ)を研究する者は「虚心平氣」でなければならぬのはもとより、「一步進んで敬愛同情の念を以てそのことに当

りたい」とアピールしているのは、その表れである。

留学中の新渡戸にとってアメリカ人は、第一に学問、第二に宗教、第三に人格の三つの面で恩人というべき存在になった。まず第一の学問について見てみよう。ジョンズ・ホプキンス大学における新渡戸は歴史・政治学科の大学院生として勉学をスタートしたが、同学科を運営する若い三名の専任教員（いずれも教授でなく、准教授またはアソシエイト）を中心として指導を受けた。たとえば歴史学者ハーバート・B・アダムズ准教授（Herbert Baxter Adams）の教会史、政治史、ルネサンス論、ゲルマン制度論、および経済学者リチャード・T・イリー（Richard Theodore Ely）の貨幣・銀行・財政・商業論、財政・行政論、経済学説史、上級経済学、財政論、あるいは歴史学者ジョン・F・ジェームソン（John Franklin Jameson）の歴史批判論などを受講し、毎週金曜日の夜八時から十時にはアダムズ准教授が主宰し、ほかの二人が補佐する歴史・政治学ゼミナールに参加した。当時のジョンズ・ホプキンス大学では、学生を単に「講義を受け入れる容器」として取り扱うのではなく、「自分の力で真理を発見する探究者」であると考える気風が確立されており、そうした学問的雰囲気の中で教員の役割は「学生たちに真理探究の手段と方法について適切な励ましや助言を与える」ことであると理解されていた¹⁸。

当初新渡戸は日本でもさかんに用いられていたハーバート・スペンサー（Herbert Spencer）やジョン・S・ミル（John Stuart Mill）の著作がジョンズ・ホプキンス大学の参考書として使われていることを知り、

アメリカの教育レベルは（日本とそれほど差がないため）低いと思ったという¹⁹。イリーからスペンサーの社会学を読んでくるようにいわれた新渡戸は約二年前にそれを読了しており、内容は大概知っていると言ったところイリーは「スペンサーの考えをどう思うか」と質問し、そのようなことを考えたことのなかった新渡戸が「スペンサーのいう通りです」と答えると、「スペンサーがどういう学説から、どういう根拠によって、あの説を述べたか、君は考察したことはないのか」、スペンサーの学説をそのまま信じるようではいけない、スペンサーの引証した主張がもと間違っており、その上に立てた説も正しいわけではないのだと論された。このとき新渡戸ははじめて「学問とはこんなものかな」と思ったという²⁰。それまでの新渡戸は東京大学で、たとえば外山正一教授がスペンサーの社会学を棒読みし、学生がそれをフォロワーしていくといった講義形式に慣れ親しんでいた。それを通じて彼はスペンサーに「すっかりかぶれて」しまい、その組織的哲学で何でも解釈ができると思いつんでい²¹た。しかしながらアメリカへ来て自分の頭を使って考える学問に目を開かされたというわけである²²。

また新渡戸はクエーカー信徒の人脈から、ボルチモアより約一七〇キロほど離れたフィラデルフィアとその周辺を訪れることが多く（のちのメリー夫人と出会うのもそうしたときであった）、そのような関係から同地のペンシルベニア大学にも足を運び、同大学の社会科学教授をつとめていたロバート・E・トムソン（Robert Ellis Thompson）の下をしばしば訪れた。あるとき新渡戸がトムソン教授にスペンサーに対する

「敬虔な心持」を語ったところ、トムソンは首を振って、「君、それはいけないことだ、そういうことをしたら君の学問はちっとも進まん。宗教においては無条件の信念を要求する。しかし学者になるには、いつもオーブン・マインドでなければならぬ」とし、「これが唯一の真理だと信ずるのは、君の学問のためによろしくない。のみならずスペンサーの説は三年くらい前にはアメリカにも相当信者があったが、近頃はほとんどなくなっている。第一スペンサーの説には弱みがある」と語った。さらにトムソンは、スペンサーがあの大著述をなして、かえって学問の進歩を妨げたと述べて新渡戸を驚かせた。¹⁸ ここでも新渡戸は批判的精神をもって自分の頭で考えよという学問の基本的態度、批判的思考を教えられたわけである。

第二に宗教について見てみよう。新渡戸にとってアメリカはクエーカー（キリスト友会）と出会った場でもあった。渡米後、各派の教会を訪れ、立派な礼拝堂、華やかな服装の信徒たち、形式的なセレモニーを見た新渡戸は、これは新約聖書にあるキリスト教とは別物のような気がするとの違和感を覚えていた。¹⁹ しかし一八八四（明治十七）年の終わりごろ訪れたボルチモアのクエーカー教会で自分にじっくりとなじむ世界を見出すことができた。

……日曜日にこの会堂へ行ってみた。その建築、内の体裁、設備装飾——否、むしろ無装飾——ことごとく十七世紀の絵で見たよう。中には若い婦人も幾多いたが、華美な着物は一人も見えない。帽子に花

をつけた者などはさらさない。それに説教する演壇もない、讚美歌もない。三百人ばかりの信徒が座禪を組むごとくにただ端然として黙座し、折に聖霊に感じた人があれば、誰でも立って二三分、長いので二十分も感話を述べる。かくすること一時間半くらいでこの静肅なる会合は解散した。……その後もしばしば会堂に行き、またその宗派の人にも交わったが、感服することが多い。……牧師を定めず、……集会は黙座瞑想を主とし、各自直接神霊に交わるをもって礼拝とするごとき、頗る僕の気に入った。²⁰

神秘体験を重視し、「内なる光」の存在を信じるというクエーカー主義によって、新渡戸は自分が潜在的に求めていた宗教、キリスト教のあり方を発見することができた。このとき彼は「はじめて、キリスト教と東洋思想とを調和させることができた」と回想している。²¹ 一七世紀にジョージ・フォックス（George Fox）によってクエーカーが創始されたのはイングランドであったが、それから約二百四十年後の一九世紀、新渡戸はボルチモアでこれに開眼したのであった。彼の宗教生活にそうした大きな変化をもたらしたのがアメリカであった。さらにこのクエーカーの人脈を通じて新渡戸は将来の伴侶となるメリー・P・エルキントン（Mary Paterson Elkinton）と出会ったが、彼にとってアメリカは生涯の宗教的教養とパートナーをもたらした運命的な国であった。このような国を彼が嫌うわけはなかったであろう。

第三にアメリカ人の人格に触れた点である。アメリカで学業を続ける

中で、彼は金銭面で相当苦慮し、大学院生としてふさわしい研究テーマを見つけることにも悩んだ⁽²²⁾。そのため彼は人生の中でくり返し悩まされた神経性のうつ病に滞米中も苦しむことになり、一八八六年の春から夏はとくにそれがひどく、セメスターが終わる前に療養のためボルチモアを離れ、フィラデルフィアに移るほどであった⁽²³⁾。留学中の新渡戸の身近には、同じ大学に在籍する同郷の先輩・佐藤昌介がいるなど恵まれた面もあったものの、異国での経済的苦境やうつ病の発症は不安であっただろう。しかしそうした新渡戸に手を差し伸べてくれるアメリカ人がいた。

たとえばアダムズ准教授は新渡戸を励まし、研究テーマについて日米関係史の研究を勧めるなどアドバイスを行うとともに、アメリカ歴史学会誌の編集作業の仕事を手話してくれた⁽²⁴⁾。またあるアメリカ人の学生が資金の援助を申し出てくれたが、金銭をもらうことに抵抗を感じて断り、そのかわりに大学より新聞切り抜きのアルバイトを得た。これは数十種の新聞に目を通して後日参考になると考えられる記事を取捨選択するという作業で、一時間二円あたりの給金が支給され、学費に充当することができた⁽²⁵⁾。

病気に關しては、かかりつけの医者が新渡戸の経済状況を考慮して一度の診察料でしばしば検診してくれたほか、転地療養の周旋もしてくれた。その際、見知らぬ学友の家族から「貴君は遠国から来られて病気にかかってお困りだろう、転地療養を勧められたそうだが、私の所は静かな田舎であるから二週間泊りにいらっしやい」、あるいは「私の宅は山の中で大変よいところだから一月位泊ってらっしやい」といった招待を

受け、三四ヶ所を回ったこともあったという⁽²⁶⁾。このように新渡戸の留学は一面辛いものではあったが、反面少なからぬアメリカ人の親切を身をもって体験することができた貴重な機会でもあった。

以上見たように、留学中の新渡戸は良きアメリカ人、好ましい環境から、第一に学問、第二に宗教を吸収し、第三にアメリカ人の親切、すぐれた人格に触れることができた。こうした原体験が新渡戸のアメリカ観の基礎となり、もともとアメリカの良い面を見ようとしていた彼は、同国への好意をより一層深めたのである。

次に留学後の新渡戸を追ってみたい。青年期に形成したアメリカ観をその後いかに発展させたのであろうか。一八八七（明治二十）年、二十四歳の新渡戸はジョンズ・ホプキンス大学大学院の学位を取得しないままニューヨークを出帆し、ドイツで第二の留學生生活を開始した。最終的にハレ大学で博士号を授与された彼は、一八九〇年七月にアメリカに立ち寄り、翌九一年一月にフィラデルフィアでメリーと結婚式をあげ、同年二月、夫婦で帰国する。その後は札幌農学校教授、台湾総督府勤務、京都帝国大学法科大学教授、第一高等学校教授、東京帝国大学農学部教授など主に教育者、農政学者としての人生を歩むことになるのは周知のとおりである。その間、彼は第三回目から第八回目のアメリカ旅行を経験しているが、その滞在期間と主な目的は左記のとおりである。

一八九二（明治二十五）年七月末頃―九月十日頃……妻の療養

一八九八（明治三十一）年十月下旬―一九〇〇年二月……本人の療養

一九〇二（明治三十五）年六月二十六日より後―八月月上旬より後……

後藤新平と欧米視察

一九一（明治四十四）年九月―一九一二年七月上旬……日米交換教

授

一九一九（大正八）年三月―五月三十一日より後……後藤新平と欧米

視察、アメリカ出立後に国際連盟事務次長就任

一九三二（昭和七）年四月―一九三三年三月……講演旅行

右のように留学を含む合計八回のアメリカ滞在をくり返した新渡戸は、当時の日本でも有数の知米家となった。そうした中で新渡戸は、アメリカ人の中に優れた品格の持ち主がいることを現地ですべて体験した。彼の言に耳を傾けてみたい。

永らく外国に遊んで、如何なる利益があつたらうと顧ると、偉^{ママ}らしい人間に逢つた事だ。……僕の偉いと云ふのは天爵の高い、前後左右何れから見ても人並以上に発達した人物を云ふので、帰朝後残念ながら同胞の中に見る事は甚稀だ。……何にも彼にも人並に出来て、其外に何かに付て群を抜く人格は残念ながら未だ同胞中には、世間狭い勢か僕の目には見当らない。斯ふ云ふ僕の注文通りの円満の発達を遂げた人間の多いのは恐らく英米の両国で、何んの極まつた型に入れられずに、自由の空気の中で思ひ存分に育つた国民に一番多からう。

新渡戸はさらにつづけて、専門に長じてなお全般の知識に通じ、事務仕事もできれば音楽や美術、政治にも詳しく、軍人とは軍事、商人とは商業をそれなりに語ることができ、しかも道徳が高く品行方正といった、「一口に云へば大きく常識の伸びた人は、英米に最も多く見られる。是が留学中の最大の賜物だ」という。²⁷⁾

このように新渡戸は、アメリカ（およびイギリス）では自由な空気の中で能力をおおらかに伸ばした常識人がいることを指摘する。ここで着目しておきたいのは、そうした人物を輩出する土壌としてアメリカ社会の自由と民主主義の気風を見ていたことである。一九一一年から一二年にかけて、日米交換教授としてアメリカを訪ねた際の経験であるが、ある日曜日の夕方、ボストン中心部の公園ボストン・コモンを散歩していた新渡戸は、二三十人の労働者あるいは商店の手代、番頭といった雰囲気の人々が一群をなしている光景に遭遇した。好奇心に駆られて近づいてみると、五十歳くらいの男が中心となって、地球は円形ではなく平面であるという新説を語っていた。演説口調ではなく個人どうしの会話のように「ねえ、そうだろう」、「そりゃ君の説は少し勘定が違うぜ」といった調子であり、それを一方からやりこめる者もいた。この物静かに思想を交換する様に、新渡戸は昔ソクラテスがアテネの市場で道を説いたときはこうであつたらうかなどと想像した。

また同じ公園の向こう側に二三百人ほどの群衆が集まっていたため、かたわらの青年にあれば何かと尋ねると、社会党の人々が日曜のため大勢集まっていると聞き、これが日本であれば嫌疑を受けるであろうが、

「自由の天地は違ふ」と思いながら、そちらに足を運んだ。すると二三百人の人々は二十ないし五十人程度ごとにわかれており、たがいの意見をまじめに落ち着いて語り合っていた。三十分の間、各グループを回って様子をうかがった新渡戸は、「容易に逆上せぬ此国民にして初めて言論の自由も思想の自由も享有すべきものと思つた」という²⁸⁾。

ただし新渡戸は、アメリカでは社会主義者による騒動や政治の腐敗がなく、自治の精神が完全無欠に発達しているというわけではないと釘を刺す。実際に「シカゴの共和党 大会の会場入口で殴り合いが三度あったというし、あらゆる犯罪が多いアメリカのことであるから、数百人の人々が集まったときにはずいぶん不体裁なこともあり得るだろうとする。しかしそういうことを並び立てるのは簡単であるが、「僕は他山の瓦礫を捕へ来たつて、自国の璞玉たまたまに比して自ら快とするの愚なる事を信ずるから、常に他山の石を藉りて自分の玉を磨くの用に供したいと思ふ」という²⁹⁾。

右の例に見られるように、新渡戸は静かに意見を交換する、言葉をかえていえば、相互の人格を尊重するということが民主主義の本質であると考えていた。身分の上下を論じず、男女、職業、教育才能とは関係なく、相互の人格を尊重する態度があつてはじめてデモクラシーの意義が解し得られる。人を人として相互の尊敬を抱くのがデモクラシーの根底的意義であつて、デモクラシーの出発点は「心の態度」であるというのである³⁰⁾。

また新渡戸は、自由と民主主義のさかんな国は「底力」があると考え

ていた。彼によると国家をすばやく進歩させるには政府が干渉し、少数の役人が人民に相談せずに改良を行えばよいが、そういう速成的方法で成り立った国は速成の弱点を免れがたく、ことあるときは脆くも倒れ、底力がはなはだ乏しいという。一九〇二年の欧米視察でパリに滞在した際、新渡戸は経済学者のポール・ルロア＝ポーリユー (Paul Leroy-Beaulieu) に会い、ドイツの勃興は世界を驚かせているものの、その経済的根底は人工的であつて鞏固ではないとの意見を聞いており、その後、第一次世界大戦におけるドイツの敗北はこれを証明するものとなつた。やはり一旦緩急あつてわかるのは、日ごろから自由を重んじ、人民の権利の範囲をなるべく広くし、その能力の發揮を奨励していた国の方が底力があることだと新渡戸はいう。ここでは具体的にはイギリスやフランスを指しているが、新渡戸は自由と民主主義がさかんなアメリカもそうした実力を備えた国と見ていたはずである³¹⁾。

以上のように留学後の新渡戸は、円満な常識人が見られるアメリカ、そうした人々を生み出す土壌として自由と民主主義の気風が存在するアメリカ、官僚主義的、全体主義的な国よりも底力のあるアメリカというイメージを形成し、そこに敬意と共感を抱いていた。そうした中で新渡戸は、良きアメリカのイメージを体現する人格者としてエイブラハム・リンカン (Abraham Lincoln) への敬意をますます強めていった。以下、彼のリンカン観に言及しておきたい。

新渡戸がリンカンを終生尊敬していたことは知られている。彼自身の言葉によると、新渡戸は十六歳のとき、日本の田舎の学校〔札幌農学校〕

にいたころ、はじめてリンカンの伝記を読んで「非常に感激」し、それ以来、リンカン(33)を神棚の偶像のように崇めるようになったという。その後、新渡戸は文字通りリンカン(34)を神格化し、一九〇七（明治四十）年、第一高等学校の校長時代には、実際に大理石でできたリンカンの半身像を室内に飾り、その第二期大統領就任演説（一八六五年）の一節である「With malice toward none, with charity for all」（誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって）を愛誦していた。新渡戸のリンカン観の中核は、要するに「一八六二年に奴隷解放宣言を行うことによって決断力と人類愛を示した人格者」というものである。この観点から彼がリンカンに寄せた賛辞には「万民に対して親愛の心持で、公平無私に一生を処した」「世界人類の敬慕に値する大的人格(35)」、「彼の性格を味はへば味はふ程甘味を感じる」、「僕が最も崇拜する人物はキリストの外にソクラテスとリンコルンとである」といった具合に枚挙にいとまがない(36)。それは絶賛といつてよいものであった。

こうしたリンカンに対する敬意は新渡戸の晩年においても衰えることがなかったが、ここで新渡戸がリンカンに関する伝記をどのように読み取っているかを見ておきたい。新渡戸の旧蔵書の中でリンカンに関するものは非常に多いが、とくに書き込みが多く、興味をもって読んだことがわかる書物の一つに、アーネスト・フォスター（Ernest Foster）著『エイブラハム・リンカン』（*Abraham Lincoln*, 一八九〇年刊）がある(37)。同書の書き入れを見ると、新渡戸がとくにリンカンの奴隷制反対に関する言動に注意を向けていることがわかる（傍線は新渡戸自身によって引

かれたアンダーライン）。

エイブラハムがニューオーリンズにいたとき（一八三二年ごろ）、彼の後の生涯を考える上でもっとも興味深いできごとが起こった。鎖につながられ、鞭でうたれ、その他の虐待を受ける黒人の一団を人生ではじめて目撃したのである。この痛々しい場面はエイブラハムの心に深い印象、悲しみをもたらし、彼はそれを決して忘れなかった。後年、抑圧された黒人の擁護者として前面に立ったとき、エイブラハムは自分が奴隷制度の邪悪性について意見をもつきっかけとなったのはこのニューオーリンズで目撃した光景であることをしばしば語ったのであった(38)。

さらに新渡戸は一八六三年一月一日にリンカンが奴隷解放宣言に署名したという箇所にもサイドラインを引き、同年十一月十九日に行われたゲティスバーグ演説の全文を引用しているページでは、演説の出だしである「八十七年前、われわれの父祖は自由の中で生み出され、すべて人は平等に造られているという主張に捧げられた新しい国家をこの大陸に創り出した」に「#」のマークをつけている(39)。

それから年月をへて一九一四（大正三）年以降、新渡戸はC・S・ビーズリー（C. S. Beardlee）著『エイブラハム・リンカンの基本的特徴』（*Abraham Lincoln's Cardinal Traits*）を読んでいる(40)。その中で新渡戸がとくに着目しているのは、リンカンの第二期大統領就任演説（一八六

五年)に言及した個所である。リンカンはこの演説で、神は奴隷制をなくすことを望んで、あえて南部と北部に戦争を与えたのであって、神の裁きと正義を信じるアメリカ国民は「誰にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛をもって」接しなければならぬことを説いている。それについて同書は、リンカンの考えにおいて北部と南部の相反する目的は全能の神の支配の下にこうべを垂れた、人間の政事においてこのようなことはまれであり、それは注目すべき(人間の)懺悔であるとして、リンカンの演説を高く評価した。新渡戸はそうした個所にサイドラインを引くとともに、余白に「○」の印をつけて注目している⁽⁴⁰⁾。またリンカンの人間性について記された部分にもくり返し興味を示しており、リンカンの非打算的な寛容性、他者への愛情、および理想主義に触れた個所に「✓」のマークを入れている⁽⁴¹⁾。

このようにリンカンに関する伝記を愛読する新渡戸は、一九一九(大正八)年四月、欧米視察の途中で、大統領になるまで約二十四年にわたってリンカンが住んでいた伊利ノイ州スプリングフィールドを訪問し、メリー夫人や後藤新平とともにリンカンの墓を詣でるとともに⁽⁴²⁾、同地で『エイブラハム・リンカンの日常生活』(*The Every-Day Life of Abraham Lincoln*)と題する一書を手に入れ、そこにも随所に「✓」の書き込みを入れている⁽⁴³⁾。リンカンに対する思いがいかに深いものであったかがうかがえよう。

ところで、当時の日本ではアメリカによるフィリピン植民地化を批判する声があった。アメリカが西太平洋まで膨張して帝国主義を發揮した

国家的野心の発露とされたのであるが、これについてリンカンに代表されるアメリカを敬愛していた新渡戸はどのような見解を抱いていたのであろうか。この点に言及することによって本章を終えることにしたい。結論からいうと、新渡戸はアメリカのフィリピン統治にネガティブなイメージを抱いていなかったようである。一九一三(大正二)年、彼はフィリピンを視察しており、その後、ジャーナリストのカール・クロウ(Carl Crow)著『アメリカとフィリピン』(*America and the Philippines*)に目を通して⁽⁴⁴⁾いる。同書は一八九九年から一九〇二年の米比戦争でアメリカ兵が用いた水治療法(water cure: 大量の水を短時間で飲ませる拷問の一つ)、あるいは「誇張された(米兵の)残忍と不道徳」といったアメリカのマイナス面にも触れており、新渡戸はそこに二重のサイドラインを引いて着目している⁽⁴⁵⁾。あるいはアメリカがフィリピン統治を容易にするため、独立革命家のエミリオ・アギナルド(Emilio Aguinaldo y Famy)を上回る英雄(ホセ・リサル Jose Protacio Mercado Rizal Alonzo y Realonda)を人工的に作り出そうとして成功した、それは道路建設や学校創設と同じくらい必要なことだったといった、やはりアメリカのマイナス面をおおせる記述があり、ここにも新渡戸はアンダーラインと「✓」「!」のマークを入れて注目している⁽⁴⁶⁾。したがって彼がアメリカのネガティブな一面を認識していたことは確かである。しかし全体を通じて、アメリカがフィリピンの反乱、ゲリラをいかに鎮圧したか、またその後どのようにフィリピン統治を進めていったのかという点に主要な関心を示している。とくに交通路(道路、鉄道、

橋梁)の建設、教育と学校の導入、衛生(河川の水質、寄生虫感染などの調査)、通貨制度、貿易と関税、農業などを説明した個所にラインを入れており、日本の台湾統治と比較しながらアメリカのフィリピン統治の実態を参考にしようとしていた形跡をうかがうことができる。「われわれ(アメリカ人)は当然、彼(フィリピン人)からある程度の感謝を期待してもよいだろう。(しかし)その代わりにわれわれはフィリピン人がアメリカ人を憎んでいること気がついたので」との個所には、日本をふり返って思い当たる節があったのであろうか、アンダーラインと「✓」が記されている⁽¹⁾。いずれにしてもアメリカのフィリピン併合と統治は、新渡戸にとってアメリカのマイナス面ではなく、むしろ日本に参考となる教訓として肯定的に受けとめられていたのである。

以上本章では、新渡戸が描いたポジティブなアメリカ像を検証した。それをまとめると以下のようになる。少年期に福沢諭吉の『学問のすゝめ』に出会ったころからアメリカの影響を受けていた新渡戸は、札幌農学校在学中、学問、宗教の両面において「学ぶべき教師としての国」アメリカのイメージを深めた。アメリカの良い面を見ようという方針のもと、留学中の彼は、自分の頭で考える学問、心から納得のできるクエーカー教義を受容するとともに、周囲のアメリカ人の温かい親切を経験した。さらに留学後は円満で常識的なアメリカ人と接し、その基礎をなすアメリカ社会の自由と民主主義、底力を認識するとともに、理想的なフィリピン統治はマイナス要因ではなく、むしろ日本の台湾統治の参考とさ

れた。

要するに新渡戸は基本的に親米派であった。しかしながらその一方で、彼はアメリカ人の人種偏見を体験しなければならなかった。これに対してどう向き合っていたのかを次章で見たい。

二 ネガティブなアメリカ像の挑戦

これまで見てきたように新渡戸はアメリカにプラスのイメージを抱いていた。しかしながらその一方で、同国からマイナスの印象を受けることも少なくなかった。渡米早々、彼は以下のような体験をしている。サンフランシスコに到着し、そこから汽車に乗って東部に向かっている途中のことである。ある駅に着いた際、新渡戸が汽車から降りてプラットホームで休憩していると、ある男が新渡戸を眺めながら「ジョン、ジョン」と呼んだ。アメリカ人は中国人一般を「ジョン・チャイナマン」と侮蔑的に呼ぶことを知っていた新渡戸は、素知らぬ顔をして無視していた。しかし相手が執拗に声をかけるため、自分はジョンという名ではないと答えると、新渡戸の後頭部をのぞいて「お前の豚尾(pigtail)はどのこへやった」という。「私は生れてから豚尾などつけたことはない」、自分は中国人ではないと新渡戸が述べると、どこの人か、日本というのどこか、中国の一部か、と立て続けに質問してきた。この男はよほど「無学な奴」だと新渡戸は思ったが、日本という国について一人でも多くの人々に知らせたいという気持で、なるべく怒らずに教えて

やったという。

男が「どこへ行くのだ、やはり洗濯屋でも開くのか」と聞いたため、「大学で経済学をやる」と答えると、男は汽車の中に入って婦人を三人ほど連れ出し、新渡戸を指さして、あれは日本という国から来た人で大学に行って経済学をするそうだ、日本という国は中国の一部ではなく、その東にある独立国だと物知り顔に説明し、「さながら見世物でも観せる様にして」案内をしたという。できるだけ物事のプラス面を見ようという新渡戸は、アメリカ人には高等教育は偉いものと尊ぶ気持がある、「劣等人種」とは思うだろうが、個人に教育があると知れば見下すこともしないとしている。⁴⁸しかし「見世物」の対象として好奇の目にさらされたことに相当の不快を感じたことは間違いないかった。

また東部に落ち着いてからの新渡戸は、街を散歩していると、「小僧」(年少の男性商店員)などからよく「やあ中国人」などといわれ、からかわれたという。このように軽く見られるのは、当方が言葉がわからな いと思われるからで、それに対して「貴様の国語が分るぞといふことを相手の者に知らせるのが、馬鹿にされない最良の防禦策」であると新渡戸は述べている。あるとき新渡戸が渡米して間もない友人二名と歩いていると、以下のようなことがあった。

……酒屋の脇に六七人生意気そうな若い者等が煙草を吸ってブラ付て居った、十間〔約一八メートル〕許り近くに行くと彼奴等は僕等を見て、何か冷評し相な形勢が見えた。そこで僕は兩人の友を止て、「オ

イ待て、彼奴等は己達を屹度冷評すに違ないから宜いか己が待てと云たら待玉へ、宜いか、言ふことを聴け」と、豫め兩人の承諾を受けて近付て六尺〔約一・八メートル〕許りの処へ行くと、果せるかな「ヤア支那人」「豚尾はどうした」杯始めたから、僕は英語で大きな声をして稍々演説口調で二人の友達に「止めつ」、それから右の手を伸して此奴等を指差し、「両君見玉へ是等は米国合衆国人民の最劣等なる標本である、朝より晩に至る迄煙草を喫み、酒を飲み、無頼の徒である、是が共和政治を誤る徒である」と逆に罵倒すると、彼奴等黙つて仕舞つて、我輩等がユル／＼前を通つても何もせず済んだことがあった。⁴⁹

この例に見られるようにアメリカ人から軽侮されて悔しい思いをしたことが少なからずあったのであろう。それだからこそ「貴様の国語が分るぞといふことを相手の者に知らせるのが、馬鹿にされない最良の防禦策」であると身構えたのである。

しかしながら新渡戸は日本人が言葉だけでなく、外見からも侮蔑されがちであることも認めていた。彼によると、日本人は外国で初めは馬鹿にされる気味がある。理由はまず風采にあり、色は黄黒で鼻は低く、頬骨は出ていて、身長は矮く、一言でいえば不恰好であるため、初めから敬意を受けることは難しい。この不恰好に加えて言葉が拙いといかに憐愍な人でも馬鹿に見えるというのである。⁵⁰新渡戸自身もアメリカ社会に入った際、そのような目に遭い、自分の外見に自信をもてなかったのであろう。その一方で、彼が日本で青春期を送った一八八〇年代は安政五

ヶ国条約の改正問題に象徴されるように、多くの日本人が「不平等条約」に屈辱を感じていた時期であり、そうした時代の空気を吸って新渡戸も西洋列強の前に愛国心を燃やしていたであろうことが推察される。後年、彼の教え子の一人は「先生の愛国心のお強いこと、殊に外国人より侮りを受けたくないと気張られお気を揉まれたジュネーヴ時代の数々の思い出……」と回想しているが、そうした西洋人から侮られたくないという気持はアメリカ留学の原体験を通じてとくに強くなったと考えられる。

アメリカの良い面を見ようとしつつ、その一方でアメリカ人のアジア人に対する人種偏見を体験していた新渡戸は、一九〇五（明治三十七）年の日露戦争終了後、アメリカで黄禍論的な反日論が顕著に現れるようになる中で、かつての日本を軽侮するとは異なり、ワールドパワーとしての日本の台頭を恐れる別の形での人種偏見に直面することになる。

一九〇六年十月にサンフランシスコ学童隔離問題が生じてから日米紳士協約の交渉が終了した一九〇八年までの期間は「第一次日米危機の時代」とされ、アメリカでイエロー・ジャーナリズムを代表するハースト系の新聞雑誌を中心に黄禍論的な日米開戦論が登場し、米政府や陸海軍首脳も次第に疑心暗鬼の状態となっていた。⁽²²⁾たとえば下院議員で予備海軍大佐のリッチモンド・P・ホブソン (Richmond Pearson Hobson) は、日米開戦になれば最終的な勝利はアメリカにあるものの、太平洋の優越を保持することが戦争を避け、あるいは決定的な勝利を収めるために必要であると説いた。⁽²³⁾

こうした戦争の風説は一九〇八年の終わりには消えたが、一九一〇

(明治四十三)年になるとアメリカで再び日米開戦論がさかんになり、「一九一〇年代の日米危機」の時代を迎えることになる。⁽²⁴⁾たとえば同年、日米未来戦論の古典的代表作として知られるホーマー・リー (Homer Lea) の『無智の勇氣』(The Valor of Ignorance) は、日米戦争でアメリカが敗北する光景を描き出し、日本への戦争準備が必要である旨を米国民に促した。⁽²⁵⁾

右のように「第一次日米危機の時代」につづいて「一九一〇年代の日米危機の時代」に入ると、新渡戸はできるだけアメリカの良い面を見ようというこれまでの持論を継続しつつ、まず日本人に向かって次のように説いた。アメリカの黄色紙の議論に日本側が過敏に反応していないのは幸いであるが、日本の中にも日米関係を傷つける意見を説く者がいる。たとえば、①日本の開国時にさかのぼってペリーの心事を疑い、同提督が平和的使命をもって来航したのかどうかを疑う者、②韓国において日本の政策を喜ばない米国宣教師が多いとする者、③満洲において米国の勢力の拡張に努めるのを難する者である。とくに①②はただアメリカ側の感情を害するだけで、根柢が甚だ薄弱の感があるのを免れないという。①のペリー来航については、自分はペリーが来日にあたって大統領に寄せた書面を二十数年前、拙著『日米交際史』『日米関係史』に収めてある。そこには使命を全うすることができないときは干戈に訴えるも可なるかの意を述べた個所がある。しかし大統領以下、みなペリーの書面に同意せず、みだりに武力を用いることに反対して発砲さえも禁止したのであって、こちらのほうが当時の米国の思想感情を代表するものであ

る。「ペルリ、ハルリス以来、歴代日本駐節の使臣又は華盛頓^{ワシントン}政府の当局者が吾国に対して多大の好意を有せることは疑ふ迄もなし。之れを忘れて、ペルリ提督の書面や、近くはホブソン^{ホブソン}少将の言に聞いて、累を日米外交の全般に及ぼさんとするは、思はざるも甚だしと云ふべし。」このように新渡戸はアメリカの日米開戦論につられて、日本側がペリーの砲艦外交の意図を批判するのは間違いであることを説き、自制を訴えた。

また②韓国における宣教師問題については、アメリカのプロテスタントの牧師で政治に容喙する者はほとんど絶無といつてよく、そのような牧師がいたとしても、必ず同輩から排斥され仲間に入れてもらえないだろう。かつて韓国に米人ハルバルト (Homer Bezaleel Hulbert) という者がおり、「其の心事陋劣にして唾棄するに堪へたり」。韓国宮廷に入りして対日策を案じたが、うまくいかなかった。彼は以前宣教師であったが、一般の宣教師は彼をもって同胞視せず、ほとんど絶交の状態にあった。「故に此等の事を以て、日米の国際関係を害なはむとするは、一二の例外を以て、事物の全般を推さんとすると同様にして、決して有識者の執るべき所の説にあらず。」ここで新渡戸が言及するホーム・B・ハルバルトは韓国で宣教、教育活動を行ったアメリカ人で、反日的な立場をとり、『韓国の消滅』(The Passing of Korea) などの著書を刊行したほか、一九〇七年のハーグ密使事件に関与したことも知られているが、新渡戸はハルバルトのような例外をもって韓国におけるアメリカ人宣教師の反日的傾向を誇張してはならないと訴えたのである。

ただし③の満洲において米国が「日本の既得權益を侵して」勢力の拡

張をはかろうとしているという点については「実に掩ふ可らざるの事実」であると新渡戸はいう。この前年の一九〇九年、ウィリアム・H・タフト (William Howard Taft) が大統領に就任すると、アメリカ政府は「門戸開放」を掲げて満洲における日本の経済活動に抗議するだけでなく、これに積極的に挑戦するようになり、フィランダー・C・ノックス 国務長官 (Phinlender Chase Knox) が「日本を満洲から燻し出す」べく満洲鉄道の中立化を各国に提案していた。そうした状況を念頭に新渡戸は、一度こうした態度を示した以上、アメリカは終始一貫してその主張を続けるだろうとして前途に不安を示し、今後アメリカの態度が平和的であることを希望した。

以上を述べた上で新渡戸は、無理な海軍力拡大を行うことなく、平和的な方法で日本を発展させ、日米関係が損なわれることなく安定することを要望した。しかし翌一九一一年(明治四十四)年になってもアメリカの日米戦争論はやまず、新渡戸の不安はつづいた。同年八月三十日、新渡戸は第一回日米交換教授として横浜を出港するが、この仕事を引き受けたことに日米関係の悪化を改善したいという彼の思いをうかがうことができる。新渡戸はアメリカで講演をくり返し、有識者を中心に日米親善を説いて回った。⁽³⁶⁾ そのうち重要な主張をまとめると以下のようになる。⁽³⁷⁾

① 日米戦争の風説……日露戦争中、アメリカが日本に惜しめない同情を送ってから六年しか経っていないのに、日米戦争が数年のうち
に避けがたいものになる、日本はフィリピンを取るだろうといった

不吉な予言が口にされている。しかし日本には朝鮮、満洲、樺太で行わなければならないことが多々あり、外国と戦争をするような余裕はない。アメリカの民衆は一九〇八年の「高平・ルート」協定を忘れていない。この文書は太平洋における相互の領土保有を尊重することを約束しており、現状に脅威を与える事態が起これば、両国政府は互いに通告の上、取るべき措置について相互理解に達することを保証している。

② 移民問題……アメリカに来る日本人移民は一九〇七年には三万人に達した。これは小さな数ではないが、同年にアメリカに来たあらゆる国籍の移民約一二〇万人の四〇分の一にすぎない。どの年においても日本人移民は移民全体の二パーセントに達したことはなく、その一方でオーストリア・ハンガリー人、イタリア人、ロシア人はいつもその二〇パーセントを超えた。日本人移民の多くはアメリカ人労働者の嫌がる農業に従事し、雇用面でアメリカ人と張り合うことはしていない。また日本政府は紳士協定を厳密に守り、アメリカへの移民を自主的に制限してきた。移民問題は事実上解決されているのである。⁵⁸⁾

③ 満洲の門戸開放問題……アメリカの新聞や雑誌では、日本が門戸開放の約束に違反して、他国に差別的待遇を与え、満洲に利己的な商業進出を行っている」と報告されているが、このように日本を非難

する者はそれを裏づける具体的事例や正確なデータを決してあげない。しかしたとえばイギリスの搾油業者は満洲の大豆が家畜の飼料として優秀であることに気づき、その需要が増えるにしたがってイギリス商社が大豆を求めて満洲奥地に入り込んでいる。実際には門戸は広々と開かれているのである。メリケン粉や石油は満洲で大きな需要があるから、アメリカの貿易が入れない理由などありはしないのである。

このように新渡戸は日米間に懸案となっている問題をそれぞれ説明し、アメリカ側の議論を批判しつつ、日米親善が決して不可能ではないことを力説した。さらに新渡戸は日本を発つ二週間前、桂太郎首相と数時間会見し、日米戦争の風説について意見を聞いており、このときの桂の言葉をメッセージとしてアメリカ人聴衆に伝えている。その桂の発言とは次のようなものであった。⁵⁹⁾

十代のとき、私は王政復古の戦いに刀をとりました。長じてドイツでは軍事学を学び、中国との戦争では將軍として陸軍を指揮しました。その後、日露戦争では首相として全国民を率いました。「したがって私は戦争のことはよく知っています。余りにもよく知りすぎています。戦争の恐怖も、その余波の一層ひどい恐怖もみな知っています。戦争のことをベラベラしゃべるのは、主に戦争など一度も見たことのない人々です。戦争について書いている新聞人は、戦争が何を意味し、

戦争には何がつきものか、果たして本当に知っているのでしょうか。私自身としては、戦争は弁護できません。私が職にある限り―そして職を去った後でさえ、国事に何か影響力をもっているかぎりは―アメリカとの戦争など無いことを、あなたに保証いたします。

新渡戸は桂首相自身からこのような言質をとり、日本のリーダーがアメリカとの戦争など考えていないことをアメリカ側に伝えたのである。また新渡戸はアメリカの聴衆に次のように訴えている。「日本の子として、またアメリカの幸せを願う者として、これらの戦いの噂は、すべて暁の到来とともに消え去る束の間の夢、恐ろしい夢魔にすぎないと判明することを、私は心から切に望みます。他のどの所で戦雲がこの地を暗くすることがあっても、太平洋上には永続的平和が支配するという目的に向けて、われわれは熱心に祈り、力を尽くして働きましょう。」⁽⁸¹⁾

以上のように新渡戸はアメリカの反日論に接して、日本側にはそれに過剰反応しないよう自制を求め、アメリカ側には日本に対する誤解を解くようにと訴えた。ところでアメリカにおける黄禍論、対日警戒論の根底には一種の人種偏見が存在したことが今日では知られている。この人種偏見という問題については留学以来、新渡戸において重要なテーマであったはずである。

アメリカでの講演において新渡戸はくり返し人種問題に言及している。たとえば、われわれは人種と人種の総体的な相違をやっと認めはじめたばかりであって、次の段階は人種間の「精神的親近性、心理的一体性」

をもっと十分に確認することではないか、すなわち「人類は精神において一つであり」、全世界は一族であるという理解ではないかという。⁽⁸²⁾ また互いにアラ探しをしたり、互いの特異性を大きに言ったりすることでは、我々は理解と尊重に到達できない。反感ではなく共感、敵意ではなく歓待心、悪意ではなく友好心によってこそ、一民族は他民族の心を知るに至るのであるとする。⁽⁸³⁾ さらに、もしあなたたちの国と私の国とが相手をさらによく知るに至れば、人類の幸福の一般的増進へ向けて、巨大な一歩が踏み出されたことになるだろうともいう。⁽⁸⁴⁾ このように新渡戸は日米の人種の違いよりも、同じ人間としての共通点を見出し、互いに歩み寄ることが大事であり、ひいてはそれが人類全体にも貢献することになると訴えた。

この両者の違いよりも共通性を強調して対立の克服をめざすという新渡戸の基本的態度は、彼の読書においても明確に表れている。新渡戸は英語の書物を通じてアメリカ人側の態度を研究していた。人種問題に関する書物の中で新渡戸がとくに熱心に読んだものとして、まずあげなければならないのはアメリカの代表的な黄禍論的反日論者の一人として知られるジャーナリスト、トマス・F・ミラーズ (Thomas Franklin Fairfax Millard) の『新しき極東』(The New Far East) である。⁽⁸⁵⁾ 新渡戸の旧蔵書には強い筆圧による太字の書き込みが随所にあり、彼がいかにこの書を熱を込めて読んでいたかがうかがえる。

同書の全体を通じていえるのは、著者のミラーズが満洲、朝鮮における日本の侵略性を強調していることである。ミラーズは日本を東洋の特

殊な国とみなし、そのことを念頭に置かなければアメリカは外交政策上、重大な誤りを犯す危険があると警告する⁽⁸⁵⁾。その際ミラードは、日露戦争前に満洲全土を占領したロシアの対満政策について好意を示す一方、戦後の日本のそれを排他的、独占的なものとして批判し、日本に同情を寄せる意見を「ずさんな推論」としたが、新渡戸は「Why does not the author use here such words & phrases as he frequently uses when describing similar things abt [about] Japan?」（なぜ「」で著者は「ロシヤに（シ）」日本に対して用いたような「厳し」言葉を用いなく（か）? 「What reform did Russia institute in Manchuria」（ロシアが満洲でどんな改革を行ったというのか）? 「The author himself」（ずさんな推論を行っているのは著者自身だ）と怒りの込められたコメントを綴っている⁽⁸⁶⁾。

また日本が韓国を事実上の保護国とした一九〇五年の第二次日韓協約について、ミラードは日本の韓国政府に対する最初の「侵略」(encroachment) としたが、新渡戸は encroachment の文字を消して「改革」(improvement) に書き改めている⁽⁸⁷⁾。ちなみにミラードが、韓国には商業発展、鉱物資源開発の可能性が間違いなくあるが、「日本の保護下では」順風満帆というわけにはいかないだろうとすると、新渡戸は「Where can you find smooth sailing in the Sea of life?」（人生という海原において君はどこに順風満帆というものを見出せるのか?）と反論を記している⁽⁸⁸⁾。そのほかに釜山の工事現場でミラードが目撃したというシーンが登場する。ミラードは日本人労働者の一人が故意に若い韓国

人労働者を肩で押しつけ、他の日本人労働者がそれを見て笑うという場面を紹介し、日本人による韓国侮蔑の悪質なケースとしたが、新渡戸は「Such trivialities are of daily occurrence in California.」（そんなささいなことはカリフォルニア州で「日本人移民に対して」毎日起こっている）と記した⁽⁸⁹⁾。日本人を差別するアメリカ人が何をいうかという意味合いなのであろう。

このようにミラードが一貫して日本を批判し続ける中で、新渡戸は「Conjectures only」（憶測にすぎない）? 「Superficial」（皮相）? 「The author attributes every Jap. action to a sinister motive.」（著者は日本のあらゆる行動を邪悪な動機によるものとする）といった書込みをくり返して、「This book is full of conjectures.」（この本は憶測に満ちている）と結論づけている⁽⁹⁰⁾。ここで記憶しておきたいのは、新渡戸がアメリカの排日論者に内心強い怒りを燃やしていたということである。このような態度は公に発表された文章の中には見られないものである。新渡戸はさらに同じく黄禍論者として知られるアメリカのジャーナリスト、ロスロップ・ストッターズ（Theodore Lothrop Stoddard）の『有色人種の勃興』（*The Rising Tide of Color against White World-Supremacy*）も読んでいた⁽⁹¹⁾。同書は、日本を代表とするアジアの有色人種がそれまでの欧米の白色人種の優越をくつがえすことを警告した、典型的な黄禍論を示すものであった。これについても新渡戸は憤りを覚えながら読み進めている。

まず同書の冒頭に人種主義者として知られ、有色人種の移民規制を主

張した法律家のマディソン・グラント (Madison Grant) が序文を寄せている。グラントは「北方人種」(Nordic race) は危険な外国からの「有色」人種と戦わなければならないとし、もし彼らのアメリカ入国を許しつづければ、われわれは自分自身の土地から追い出されるだろうと警告する。加えて、外国人が南欧、東欧からの移民であろうと、より明白に危険な東洋人であろうと、彼らと北方人種の競争は宿命的であることを知る必要がある、アメリカ人の血統をもった農民や職工がこの危険を認識し、それに対処しなければならぬと主張した。⁽¹⁶⁾ これを読んだ新渡戸は「アメリカ人の血統」にアンダーラインを引き、余白に「So little is said of White dispossessing Indians.」(白人がインディアンを追い出したことには触れない)と記してアメリカ人の痛いところを衝いてみせる。

次に同書の本文において著者のストッダードは、日本人が極東モンロー主義を掲げつつ、大規模な征服と世界支配の夢を抱いていると警告する。ここは新渡戸がとくに注目した個所であり、大きく「？」と書き込んで⁽¹⁷⁾いる。さらにストッダードが、一九一六年の秋に書かれたというある日本の帝国主義者による「世界制覇」の「途方もない考え」を紹介し、これは日本全体を代表しているわけではないにせよ、日本における有力分子を代表するもので、白人世界はあらかじめそれを警戒すべきであると述べる⁽¹⁸⁾と、新渡戸は「Far from it. Who is the writer any way?」(決してそんなことはない。いずれにせよ、その「途方もない考えの」筆者とは誰なのだ?)⁽¹⁹⁾として⁽²⁰⁾いる。

また人種主義者のストッダードは人種の差違を強調し、異人種同士が融合しないとする意見をくり返し展開したが、これは民族間の融和を望み、それが可能であると考える新渡戸の思考とは真っ向から対立するものであった。そのため新渡戸はこうした個所にアンダーラインや「？」のマークを書き込んで注意を払っている。⁽²¹⁾皮肉なことに、新渡戸と同様にジョンズ・ホプキンス大学でリチャード・T・イリーから指導を受け、政治経済学の博士号を受けた社会学者のエドワード・A・ロス (Edward Alsworth Ross) の意見も紹介されており、ロス教授は門前の外国人に同情して自分の子供に同情しないような者には耐えられなかった、同教授は平和の鳩のまことの敵はプライドの高い驚、食欲なハゲワシではなく、「赤ん坊を運んでくる」コウノトリ(日本)だとしている、⁽²²⁾といった個所に新渡戸はアンダーラインを引いている。

ストッダードは最終部分で次のように結論づけている。「アジアには次のことがはっきりと言い渡されるべきである。われわれは白人の土地への移民も非白人の熱帯への浸透も許すことができない。これらの問題のためにわれわれは屈服するよりもむしろ最後まで戦うことを選ぶ。——なぜならわれわれの『最後』とはこれらの点についてまさに降伏することを意味するからである。」これを讀んだ新渡戸は「What a threat!」(何という脅し!)との慨嘆を書き込んだ。⁽²³⁾

右に見られるように、新渡戸はアメリカの排日論者の意見を熟読し、その思考や論理をよく認識していた。それと同時にそこに強い怒りを感じており、思わず反論を書き込まざるを得なかったのである。基本的に

アメリカへの好意的なイメージをもち、日米両国民に融和と相互理解を説く新渡戸であったが、その心はアメリカ人の側から提出された反日論に対する憤りでさいなまれていたのである。

以上、本章では新渡戸が描いたネガティブなアメリカ像を検証した。それをまとめると以下のようになる。アメリカに好意的なイメージをもつ新渡戸は日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な反日論、排日論の挑戦を受ける形になった。彼は、日本国民にはそれにつられて反米論で応酬しないように自制を訴え、アメリカ国民には排日論者の主張が誤っている旨を説明した。新渡戸は表向きはアメリカの良い面を見ようという方針を維持していたが、内面においてはアメリカの排日論に強い怒りを感じ、その心はアメリカへの親愛の情と憤慨の情の間で揺れ動いていたのである。

そうした中でアメリカの排日論が「排日移民法」という具体的な形と なって結実、立法化される。それまでの新渡戸の人生の中で最大といってもよい挑戦がアメリカからなされたことになるが、これに対して彼はどのように対応したかを次章で見ていくことにする。

三 アンビバレンスの克服への試み

一九二四（大正十三年）五月、アメリカで「一九二四年移民法」（いわゆる排日移民法）が成立し、日本人移民は「帰化不能外国人」としてアメリカへの入国が絶対的に禁止された。この法律の背景に人種偏見が

存在したことは日米両国の研究者が指摘しており、周知のとおりである。新渡戸が多くの日本人と同様、排日移民法に衝撃を受けたことはよく知られている。同法に対する思いを彼は次のように述べている。

甚だ感情的で、笑はれるかも知れないが、彼の移民法が出てから、私は、二度と亜米利加の土を踏むまい、といふ決心をしてゐる。あまりに癪に触るから行かないのである。友人達はぜひ出かけて来い、君が来れば大いに歓迎するといふが、俺は嫌だ、自分の同胞を侮辱して、僕一人を歓迎するなどといふのでは、死んでも行かない。妙に旋毛つむじが曲つてしまつて、どんなに招ばれても行かないことにした。

アメリカ人の多くが法案に反対していたことを私は知っているが、「日本人を歓迎しないことを、国法で定めた国である。そんな所へわざわざ出かける必要はない」というのである。⁷⁹ また次のようにも述べている。

この立法措置が日本に与えた影響は、甚大なものであった。日本は、あたかも永年の親友から、突然になんの挑発行為もしないのに、頬を打たれたような感じをもった。日本は、アメリカの議員たちの正気を疑った。沈黙しながらも、日本が心中ひそかに決心したことは、法の制定に関する一国の法的「権利」がどうであるにせよ、いわゆる「紳士らしい」態度とはほど遠いやり方で通過させたこの法律に対して、

徹頭徹尾反対するということだった。なんら修正あるいは撤廃措置もなく一年、一年が過ぎてゆくにつれ、われわれの受けた傷はますます強まり深まって行って、それが今後、なんらかの形で日米両国間の交流に悪影響を及ぼしてくるのは必定である。ある国家が、他の国家に対して心中に疑惑と恨みの種子を蒔くとしたら、どんなに平和や親善を叫んでも無駄である。⁸⁰⁾

このように排日移民法の制定によって新渡戸が受けた心理的な傷は相当深いものがあつた。一方でアメリカに敬意を抱き、他方でアメリカの反日論に苦しめられてきた新渡戸は、ポジティブなアメリカ像とネガティブなアメリカ像とのさまにあって心理的に格闘してきたわけであるが、この排日移民法という決定的な痛打に対してどのように対処したのであるうか。

まず彼は怒りを感じながらもアメリカ人に対する信頼を持続していた。アメリカの新聞や宗教団体などの中に排日移民法に反対する人が少なからずいたことを認識しており、それが新渡戸にとって慰めとなっていた。⁸¹⁾しかしながら彼にとくにインパクトを与えたのは、アメリカ人自身の口からそれを聞いたことであろう。当時、国際連盟勤務のためジュネーブにいた新渡戸は、ホテルで若いアメリカ人の大学講師から「あなたは新渡戸さんですか」と呼びとめられた。「そうです」と答えると、先方はポケットから紹介状を取り出して自己紹介し、近くの木陰でお茶を飲むことになった。その際、男性はかたわらに立っていた若い女性を自分の

妻であるとして紹介した。新渡戸が握手しようと手を差し伸べると、婦人は彼の手をとりながらほろほろと涙を流し、声をふるわせて、「私はあなたと握手する資格がない」と言い出した。女性がいうには「私は自分の国ながらアメリカの議会が排日的法案を出したことを国辱と思ひます。友邦国である日本にこんな侮辱をするとは、何というやり方でしょう。私は日本人に対してただ恥じ入るばかりです。それに今あなたがわれわれを親切に受け入れたことについて、一層私の心がこの恥を感じるのです」。これを聞いて新渡戸は少なからず「感激」し、次のように答えた。「今度の法案はアメリカ国民の輿論であるとは私は信じません。少数の議員や排日運動家の仕業だと思ひます。……あなたと意を同じくする人がたくさんいるだろうと思ひます。それがまたアメリカの強みであると思ひます。そういう人々の考えが後日力を得て、この法案が撤廃される日もありましょう。」このように述べて新渡戸は二人を案内し、⁸²⁾話題を変えて時を過ごしたという。

さらに彼がジュネーブにいる間、あるアメリカの老婦人が同地に移転してきた。その婦人はかねてから親日家で、ここ数年間ワシントンに住んでいたが、排日法が通過するとこのような無謀なことをする国には愛想がつきるとして、一家を引き払ってジュネーブにやって来たのだとい⁸³⁾う。以上のようにアメリカ人の口から排日移民法への反対を直に聞いた体験は、彼の心に大きな影響を与えたと考えられる。アメリカに絶望する必要はない、将来に望みをつなげることができるかもしれないと彼は考えたのである。

右のように新渡戸はアメリカ人から率直な意見を聞くことにより、アメリカへの信頼を維持することができた。さらに彼がアメリカに望みを失わなかったもう一つの理由として付け加えたいのは、アメリカとの具体的接触を通じて新渡戸がアメリカ人に共感を抱くようになっていたことである。「私は実際、亜米利加人の氣質に、共鳴する点が少くないのである」と彼はいう。⁸⁵ それではここでいうアメリカ人の氣質とはどのようなものをいうのであろうか。

新渡戸によると、アメリカ人は未開の土地に鋌一本、鋤一つで入ったので、俺が俺がという自尊心が強いが、それと同時に「ネイバーフッド・フィーリング」、隣保の感情というものがあるという。広漠たる土地に移り住み、そこで大いに個性を伸ばしたため、良くも悪くも個人主義が発達したが、それとともに、人間は一人で生きていくことができるものではないため、近所の人々と仲良く暮らすことが生活の条件になった。リンカンはその一人で、あのケビンに生まれたからこそ、ああいうのびのびした性格になり、しかもロッキー山の横腹からえぐり出した岩石のように荒っぽいところがある。あのような人間を造る環境がアメリカにはある。すなわち個人的に伸びると同時に、ネイバーフッドがあるというのである。⁸⁶ 個人主義を大事にし、しかも近隣の人々への親愛の情もあわせもつ、そうしたアメリカ人の氣質が自分好きなのだというのである。

ここでいう「ネイバーフッド・フィーリング」だけでなく、第一章で見たように新渡戸はさまざまなアメリカへの友好的なイメージを長年に

わたって、実体験を通じて培ってきた。それだからこそアメリカへの好意は排日移民法の試練にあっても消滅することがなく、なお彼に前向きな姿勢をとらせたということができよう。実際に一九二九（昭和四）年から翌三〇年にかけて、アメリカでは排日移民法を改正しようとする動きが生じるようになる。これを聞いた新渡戸は次のように述べた。

今や米国人が此排日移民法案が過れると知つて其過を改めるのに躊躇しないのは大いに見上げたものである。

……若し修正説がお流れになつたら、我輩の米国人礼讃が頗る可笑しいものにならう。然し我輩は茲に断言する、よし今回お流れとなるやうなことがあつても、彼の国に於ては其非を悟り、其修正の為に日夜の食をも忘れて努力する輩の存在する一事である。我国に於て支那人、若しくは朝鮮人に対して折々過れる政策に就て、其改良、或は修正を為さしめんが為努力しつゝある者が幾何かある。寡聞我輩は朝鮮人や支那人に対して正義と同情の心もて努力しつゝある同胞の何処にあるかをいまだ聞かぬ。⁸⁷

このように新渡戸はアメリカに同法修正のため尽力する者がいることに期待をかけ、希望を断念することはなかったのである。さらに一九三一年八月、新聞報道を通じて彼は、排日移民法の改正が有望であることを感じ、喜びをかいま見せていた。⁸⁸ ところが翌九月に勃発した満洲事変を契機として日米関係は変転を遂げ、同法の改正は難しくなり、結局そ

れが実現したのは第二次世界大戦後の一九五二年となった。

次に新渡戸は排日移民法を制定したアメリカに対してどのように対処するべきだと考えたのであろうか。結論を先に述べると、それはアメリカの回復力に期待して、穏やかに、忍耐強く待つということであった。アメリカで排日移民法改正の動きが生じたのは、日本の政府と識者が「穏かなる方法に依て米国人の反省を促すことに努めた」からであると新渡戸はいう。この穏やかな方法こそ実にご当を得たものであって、もし乱暴、無礼な方法に出ていたら、撤廃案など出なかつたであろうというのである。ある米国人によると、この乱暴な法律に対する日本人の態度が米国人の良心を呵責し、米国人自ら恥づるに至つたというが、これが実際の話であつて、米国人の取り柄である。「彼等には確かに日本人よりは是非曲直の判断力があつて、自国の為したことも、是は是、非は非と判断する力は到底吾々の及ぶ処ではない」と新渡戸は指摘している。⁸⁸⁾

ここで着目しておきたいのは、新渡戸がイギリスの政治家として有名なジェームズ・ブライス (James Bryce) の故事を引いていることである。「曾てブライス卿が牧野伯に云はれたといふ言に、米国を信ぜよ、折々過ち無しとはいはぬも、必ず是は是、非は非の判断を為す国であるから、と。」⁸⁹⁾アメリカはときどき過ちを犯すが、のちに自分の行ったことに対して必ず是々非々の判断を下すというのである。

このブライスの言葉は牧野伸顕の回顧録にも記されている。一九一三 (大正二) 年二月から翌一四年四月まで第一次山本権兵衛内閣の外務大臣をつとめた牧野は、当時カリフォルニア州で成立した外国人土地法

(いわゆる排日土地法) に悩まされた経験があつた。この問題についてアメリカ側と交渉中、駐日イギリス大使ウィリアム・C・グリーン (William Conyngham Greene) から、現在ジェームズ・ブライス駐米イギリス大使が来日中であるが、彼はワシントンの空気をよく心得ているので話を聞いたらどうかとの好意的な申し出があつた。ブライスはその著書『アメリカン・コモンウェルス』 (The American Commonwealth) を通じて日本の知識人の間でもよく知られていたので、牧野はぜひ会いたいと応じ、イギリス大使館で面会することになった。この席でブライスは、ワシントンで折衝にあたっている珍田捨巳大使を称賛した上で次のように述べた。「アメリカではある事件について一旦輿論が沸き立つと、政府と交渉しても、当局者と冷静に話を進めることはなかなか困難です。」現に自分の経験では、パナマ運河に関する条約の解釈で英米間に意見の相違が生じた際、イギリスはこれを国際航路、アメリカは私海航路とみなし、折衝を重ねたが折り合いがつかず、イギリスは抗議書を提出したまましばらく成り行きを見ることにした。しかし数年してハーヴァード大学のチャールズ・W・エリオット学長 (Charles William Eliot) をはじめ数名の人々がこの問題をとり上げ、国際航路とするのが正しいという意見を發表し、それがきっかけとなってこの見方が大勢を制するにいたつた。このようにブライスは自身の経験を詳しく牧野に説明した。そのときをふりかえつて牧野は、確かにこれは場合によっては賢明な態度であり、とくに事態が切迫していないときは当を得た措置であると回想している。⁹⁰⁾

これと似た話を幣原喜重郎も記している。一九一二年ないし一三年、在米日本大使館参事官として幣原がワシントンに駐在していた際に、先述の Panama 運河問題が英米間に生じた。アメリカは自国の船舶の通行税を免除する一方、外国船に相当重い税金をかけようとした。これに対してイギリス側のブライズ大使は英米船舶の間に差別待遇を禁ずることを約したヘース・ボンズフット条約にもとづきアメリカに抗議したが、アメリカ上院は Panama 運河の通行税法案を通過させ、イギリスの抗議は水泡に帰した。この上院通過の翌日、幣原は英大使館でブライズ大使と会い、「あなたは抗議を続けられるのでしよう、このまま打ち捨てておくわけにはいかないでしょう」と尋ねたところ、ブライズは次のように答えた。「いいえ、どんな場合でもイギリスはアメリカと戦争をしない国是になっています。戦争をする腹がなくて抗議ばかりを続けて何の役に立つでしょうか。私はもう抗議などという有害無益の交渉は打ち捨てておきます。われわれは区々たる面目や一部分の利害に拘泥して大局の見地を忘れてはなりません。」このように述べたブライズはカリフォルニア州の排日問題に話題を転じ、あなた方の抗議はどうしますかと質問した。やはり抗議を続けるしかないと言った幣原が答えると、ブライズはこれだけのことでアメリカと戦争をして日本の存亡興廃をかけるような問題ではないでしょう、私ならもう思い切りますと述べ、次のように付け加えた。「アメリカ人の歴史を見ると、外国に対して相当不正と思われるような行為を犯した例はあります。しかしその不正は、外国からの抗議とか請求とかによらず、アメリカ人自身の発意でそれを矯正しています。

これはアメリカの歴史が証明するところです。われわれは黙ってその時期の来るのを待つべきです。カリフォルニア州の問題についても、あなた方が私と同じような立場を取られることを忠告します。」その後、第一次世界大戦が始まると、アメリカは Panama 運河の差別的通行税を自発的に撤廃した。幣原は「アメリカは自発的に自己の過失を反省したのである」、自分はブライズの先見の明に敬服せざるを得なかったと記している。

右のようにブライズは、カリフォルニア州の排日問題について Panama 運河通行税問題を引き合いに出しつつ、同盟国日本の牧野外相、幣原在米参事官に、アメリカの自発的反省を待つようにとアドバイスした。このエピソードは比較的知られているが、ここで重要なことは新渡戸が牧野の体談(ブライズのアドバイス)を直接ないしは間接的に聞いていたことである。アメリカはときに他国から見ると理不尽で極端に見えることを行うが、硬直した国家ではなく、やがて自省の上、常識的な線に戻っていく回復力をもっている。そのような見方は新渡戸が長年行ってきたアメリカ観察に沿うものであり、それだからこそブライズの意見は我が意を得たものであるという形で心に残ったのではないか。新渡戸はこのブライズ、ひいては自分自身の考えにもとづき、アメリカのリカバリー・パワーを信じつつ、その変化を待ち望んだ。一九三二(昭和七)年一月の第一次上海事変勃発によってアメリカの対日感情がとくに悪化した後、排日移民法の改正は相当の困難が予想されたが、それでも新渡戸は「日本は米国人の全体としての誠実さと名誉感に信を置き、間違い

が正される唯一の道である連邦議会の同法改正まで、忍耐強く時の経過を待つものである」と述べている。⁽⁹²⁾

それとともに彼は単に沈黙して我慢を重ねるのではなく、一九三二年四月から翌三三年三月に全米講演旅行を行った際、以下のようにアメリカ人に訴えることも忘れなかった。「人間の平等が完全に認められない限り、誠意ある国際協力の事業が不可能なのは明らかである」、国際協力を成功裡に推進する第一の条件は、よく組織された国家はすべて平等と見なされることである。異なった国民に異なった特徴があるのは否定できない。われわれは相互の相違点を理解し、調整するよう努めねばならない。しかし基本的には人類は精神において一つであり、この基本に向かってわれわれは近づいている。⁽⁹³⁾ 以上のような趣旨を新渡戸はアメリカで唱えたのであった。

最後に以上のような新渡戸の見方、態度の根本には、やはりキリスト教の精神があり、一九二四年の排日移民法成立後、彼がキリスト教の精神を再確認していたことを指摘しておきたい。新渡戸は一九二五年ないしそれ以降、イギリスのクエーカー宣教師ジョン・S・ホイランド(John Somervell Hoyland)の『人種問題とイエス・キリストの教え』(*The Race Problem and the Teaching of Jesus Christ*)を読んだ。⁽⁹⁴⁾ 同書にはアメリカの排日論とは対照的に、自国(イギリス)の人種偏見や落ち度を率直に認めるといふ著者の態度が示されていた。それによると「残念ながらアングロサクソン民族は有色人種に対する偏見にひどくかられやすい。」⁽⁹⁵⁾ 極端な例ではオーストラリアのタスマニアで白人移民

がアポリジニを未開で獣のようだとみなして絶滅することを決定、実行した。⁽⁹⁷⁾ (しかし)一つの民族が自己意識と思考力のある別の民族をどこでも永久に政治的に支配することが許される限り、人類の融和は望み得ない、⁽⁹⁸⁾ としてイギリス側の問題点を明瞭に指摘する。⁽⁹⁹⁾ その上で、イエス・キリストが十字架上に命を捧げて実現した人間と神との和解の福音により世界は救われ、人種の反目の問題は解決されるのだと主張する。⁽¹⁰⁰⁾ 著者のホイランドによれば、神(God)が人類の父であることを強力に確信することによってのみ、人類はみな兄弟なのだという考えに説得力が出て、民族間の障壁を破壊する力になるといふ。さらに民族衝突の調停者は、イエス・キリストの友愛の精神、東洋であろうと西洋であろうと人類すべてを平等に愛する神への熱意に満ちあふれ、敵意や分裂を滅ぼす雰囲気周囲に広めるだろうとする。⁽¹⁰¹⁾ そのように述べた著者のホイランドは、多くの人々がキリストの理想に従ってその友愛の精神に生きれば生きるほど、人種問題は解決していくだろうと締め括る。要するに西洋人はキリスト教の精神にもとづき有色人種への差別を改め、人類の融和を実現しなければならぬという内容である。今日のように人権が重視され、レイシズムの誤りが当然視される時代においては、このような意見に新鮮味を見出すことはできないものの、約九十年前のまだ人種偏見が根強かった当時において西洋人の側からこのような主張がなされたということに同書の意義があったといえる。新渡戸はこのような書物に目を通して、西洋にも自分と同じような考えの人物がいること、キリスト教による人種間の障壁打破の可能性を再確認したのであろう。

以上本章では、一九二四年の排日移民法の成立に衝撃を受けた新渡戸が、良きアメリカと反日的なアメリカの二つのイメージのはざまにあって、どのように対処したかを検証した。排日移民法に憤り、アメリカの地を踏むことを拒否した新渡戸ではあったが、それでも忍耐してアメリカの良き面、すなわち回復力（リカバリー・パワー）を信じ、将来アメリカ人自身が移民法改正を実現することに期待をかけた。またその一方で、人種、民族の衝突はキリスト教の眼目である友愛の精神で解決していくしかないという考えを再確認したのである。

おわりに

本稿は青年期から六十代にいたる新渡戸のアメリカ観をトータルに検証し、彼がアメリカに対していかなる心理的葛藤を抱き、それをどのように克服しようとしたかという点を考察した。

結論として以下をおさえておきたい。第一に新渡戸は、留学前から学問、宗教の両面において「学ぶべき教師」の国アメリカのイメージを深め、アメリカ留学時には批判的精神をもった学問、ならびにクエーカー教義を受容し、さらにアメリカ人の親切を身をもって体験した。留学を終えた後は円満で常識的なアメリカ人と接し、アメリカ社会の自由と民主主義に対する理解を広げつつ、リンカンを敬愛しつつけた。

第二に新渡戸は、日露戦争後、アメリカで現れた黄禍論的な反日論、排日論の挑戦を受ける形になり、日米両国民に融和と相互理解を訴えた。

ただしアメリカの排日論に対して彼は強い怒りを感じており、その心はアメリカへの親愛の情と憤慨の情の間で揺れ動いていた。

第三に新渡戸は、一九二四年の排日移民法の成立に衝撃を受けたが、アメリカの回復力を信じ、将来アメリカ人自身の手で同法が改正されることを期待した。

ポジティブなアメリカ像とネガティブなアメリカ像の葛藤に苦しんだ新渡戸は、最終的にアメリカ人の自己改革力に期待をかけ、みずからの中で揺れるアンビバレントな心情を整理し、落ち着かせようと試みたのである。このような対処法は人によって異なるものであり、だれもが新渡戸のような態度をとるわけにはいかないであろう。しかしながら日本知識人の一人がアメリカに対してこのような心理的プロセスを示したということは、一つの歴史的遺産として、今後アメリカと日本（あるいはその他の国々）との関係を考える上で何らかの教訓ないしはヒントになるのではないだろうか。

《註》

- (1) ①のアメリカ留学時代については、和泉庫四郎「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究——I. 佐藤昌介・新渡戸稲造のアメリカ留学時代の履修記録」『鳥取大学農学部研究報告』第三五号、一九八三年一月、Jun Furuya (古矢旬), "Nitobe Inazo in Baltimore: A Graduate Student and Quaker," 上智大学国際関係研究所『国際学論集』第一五号、一九八五年七月、和泉庫四郎「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」『鳥取大学農学部研究報告』第三八号、一九八五年十一月、大